〔B 年〕聖霊降臨節第 18 主日(2022 年 10 月 2 日)

【旧約聖書日課】出エジプト記12章21～27節

21モーセは、イスラエルの長老をすべて呼び寄せ、彼
らに命じた。「さあ、家族ごとに羊を取り、過越の犠牲
を屠りなさい。22そして、一束のヒソプを取り、鉢の中
の血に浸し、鴨居と入り口の二本の柱に鉢の中の血を塗
りなさい。翌朝までだれも家の入り口から出てはならな
い。23主がエジプト人を撃つために巡るとき、鴨居と二
本の柱に塗られた血を御覧になって、その入り口を過ぎ
越される。滅ぼす者が家に入って、あなたたちを撃つこ
とがないためである。24あなたたちはこのことを、あな
たと子孫のための定めとして、永遠に守らねばならない。
25また、主が約束されたとおりあなたたちに与えられる
土地に入ったとき、この儀式を守らねばならない。26ま
た、あなたたちの子供が、『この儀式にはどういう意味
があるのですか』と尋ねるときは、27こう答えなさい。
『これが主の過越の犠牲である。主がエジプト人を撃た
れたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ
越し、我々の家を救われたのである』と。」民はひれ伏
して礼拝した。

【使徒書日課】ヘブライ人への手紙9章23～28節

23このように、天にあるものの写しは、これらのもの
によって清められねばならないのですが、天にあるもの
自体は、これらよりもまさったいけにえによって、清め
られねばなりません。24なぜならキリストは、まことの
ものの写しにすぎない、人間の手で造られた聖所にでは
なく、天そのものに入り、今やわたしたちのために神の
御前に現れてくださったからです。25また、キリストが
そうなさったのは、大祭司が年ごとに自分のものでない
血を携えて聖所に入るように、度々御自身をお献げにな
るためではありません。26もしそうだとすれば、天地創
造の時から度々苦しまねばならなかったはずです。ところ
が実際は、世の終わりにただ一度、御自身をいけにえ
として献げて罪を取り去るために、現れてくださいました。
27また、人間にはただ一度死ぬことと、その後に裁
きを受けることが定まっているように、28キリストも、
多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、
二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望して
いる人たちに、救いをもたらすために現れてくださるの
です。

【福音書日課】マルコによる福音書14章10～25節

10十二人の一人イスカリオテのユダは、イエスを引き
渡そうとして、祭司長たちのところへ出かけて行った。
11彼らはそれを聞いて喜び、金を与える約束をした。そ
こでユダは、どうすれば折よくイエスを引き渡せるかと
ねらっていた。

12除酵祭の第一日、すなわち過越の小羊を屠る日、弟
子たちがイエスに、「過越の食事をなさるのに、どこへ
行って用意いたしましょうか」と言った。13そこで、イ
エスは次のように言って、二人の弟子を使いに出された。
「都へ行きなさい。すると、水がめを運んでいる男に出
会う。その人について行きなさい。14その人が入って行
く家の主人にはこう言いなさい。『先生が、「弟子たち
と一緒に過越の食事をするわたしの部屋はどこか」と言
っています。』15すると、席が整って用意のできた二階
の広間を見せてくれるから、そこにわたしたちのために
準備をしておきなさい。」16弟子たちは出かけて都に行
ってみると、イエスが言われたとおりだったので、過越
の食事を準備した。17夕方になると、イエスは十二人と
一緒にそこへ行かれた。18一同が席に着いて食事をして
いるとき、イエスは言われた。「はっきり言っておくが、
あなたがたのうちの一人で、わたしと一緒に食事をして
いる者が、わたしを裏切ろうとしている。」19弟子たち
は心を痛めて、「まさかわたしのことでは」と代わる代
わる言い始めた。20イエスは言われた。「十二人のうち
の一人で、わたしと一緒に鉢に食べ物を浸している者が
それだ。21人の子は、聖書に書いてあるとおりに、去っ
て行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれ
なかった方が、その者のためによかった。」

22一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、
賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言
われた。「取りなさい。これはわたしの体である。」23
また、杯を取り、感謝の祈りを唱えて、彼らにお渡しに
なった。彼らは皆その杯から飲んだ。24そして、イエス
は言われた。「これは、多くの人のために流されるわた
しの血、契約の血である。25はっきり言っておく。神の
国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実から作ったもの
を飲むことはもう決してあるまい。」

「聖書協会共同訳」（2018年版）読み比べ

出エジプト記12章21～27節

21そこで、モーセはイスラエルの長老たちを皆呼び寄
せて言った。「行って、家族ごとに自分たちの羊を選び、
過越のいけにえとして屠りなさい。22そして、ヒソプを
一束取り、平鉢に入れた血に浸して、平鉢の血の一部を
入口の鴨居と二本の柱に付けなさい。朝まで誰も家の出
入り口を出てはならない。23主は、エジプト人を打つた
めに行き巡るとき、入口の鴨居と二本の柱の上にある血
を目にされると、その出入り口を過ぎ越され、滅ぼす者
があなたがたの家に入って、打つことがないようにされ
る。24あなたがたは、自分とその子孫のための掟として、
このことをとこしえに守らなければならない。25主が語
られたとおり、あなたがたに与えられる地に入ったとき、
この儀式を守らなければならない。26子どもたちが、『こ
の儀式の意味は何ですか』と尋ねるときは、27こう言い
なさい。『それは主の過越のいけにえである。主がエジ
プトの地で、エジプト人を打たれたとき、イスラエルの
人々の家を過ぎ越し、私たちの家を救われた。それで、
民はひざまずき、ひれ伏すのである。』」

ヘブライ人への手紙9章23～28節

23ですから、天にあるものの雛型は、これらのものに
よって清められねばなりませんが、天にあるもの自体は、
これらより優れたいけにえによって清められねばなり
ません。

24事実、キリストは、本物の模型にすぎない、人の手
で造られた聖所にではなく、天そのものに入り、今や私
たちのために神の前に現れてくださったのです。25それ
も、毎年自分のものでない血を携えて聖所に入る大祭司
とは違い、キリストは、ご自身を何度も献げるようなこ
とはありません。26もしそうだとすれば、天地創造の時
から、度々苦しまねばならなかったはずです。ところが
実際は、世の終わりに、ご自身をいけにえとして献げて
罪を取り除くために、ただ一度現れてくださいました。
27そして、人間には、ただ一度死ぬことと、その後裁き
を受けることが定まっているように、28キリストもまた、
多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、
二度目には、罪を負うためではなく、救いをもたらすた
めに、ご自分を待ち望んでいる人々に現れてくださるの
です。

マルコによる福音書14章10～25節

10十二人の一人イスカリオテのユダは、イエスを引き
渡そうとして、祭司長たちのところへ出かけて行った。
11彼らはそれを聞いて喜び、金を与える約束をした。そ
こでユダは、どうすれば折よくイエスを引き渡せるかと
狙っていた。

12除酵祭の第一日、すなわち過越の小羊を屠る日、弟
子たちがイエスに、「過越の食事をなさるのに、どこへ
行って用意いたしましょうか」と言った。13そこで、イ
エスは次のように言って、二人の弟子を使いに出された。
「都へ行きなさい。すると、水がめを運んでいる男に出
会う。その人に付いて行きなさい。14そして、その人が
入って行く家の主人にこう言いなさい。『先生が、「弟
子たちと一緒に過越の食事をする*宿屋〔別訳→客間〕*は
どこか」と言っています。』15すると、席のきちんと整
った二階の広間を見せてくれるから、そこに私たちのた
めに用意をしなさい。」16弟子たちは出かけて都に行っ
てみると、イエスが言われたとおりだったので、過越の
食事を準備した。17夕方になると、イエスは十二人と一
緒にそこへ行かれた。18一同が席に着いて食事をしてい
るとき、イエスは言われた。「よく言っておく。あなた
がたのうちの一人で、私と一緒に食事をしている者が、
私を*裏切ろうとしている〔別訳→引き渡そうとしている〕*。」19弟子たちは心を痛めて、「まさか私のことで
は」と代わる代わる言い始めた。20イエスは言われた。
「十二人のうちの一人で、私と一緒に鉢に食べ物を浸し
ている者だ。21人の子は、聖書に書いてあるとおりに去
って行く。だが、人の子を*裏切る者〔別訳→引き渡す者〕*
に災いあれ。生まれなかったほうが、その者のためによ
かった。」

22一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、
祝福してそれを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取
りなさい。これは私の体である。」23また、杯を取り、
感謝を献げて彼らに与えられた。彼らは皆その杯から飲
んだ。24そして、イエスは言われた。「これは、多くの
人のために流される、私の契約の血である。25よく言っ
ておく。神の国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実か
ら作ったものを飲むことはもう決してあるまい。」

黙想のためのノート

次主日教会暦と聖書日課について

・10 月 2 日「聖霊降臨節第 18 主日」の日課主題は「キリストに贖われた共同体」。

・10 月第 1 主日は教団行事暦の「世界聖餐日・世界宣教の日」。「世界聖餐日」は、1946 年以来、世界教会協議会（WCC）が諸教会に「聖餐における教会の一致」を呼びかけてきたエキュメニカルな行事で、日本基督教団も同年に教団統理（当時）が全教会に通知を出して記念するようになった。この行事暦に合わせた聖書日課も提案されているが、通常の「聖霊降臨節第 18 主日」の主日聖書日課に従う。

・旧約聖書日課は、「出エジプト記」から、モーセに率いられた民がエジプトを出る前夜に経験した「過越」の出来事を伝える逸話の一部。使徒書日課は、「ヘブライ人への手紙」から、「天の聖所の写し」としての地上の営みという観点からキリストの働きを解釈する中の一部。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、イスカリオテのユダの裏切りと「過越の食事＝最後の晩餐」の伝承逸話の箇所。

旧約日課（出エジプト 12 章より）

・「出エジプト記」は、ユダヤ正典「律法」の第二に置かれ、「申命記」まで続く「モーセ物語」全四巻の第一巻を構成する。「出エジプト記」が扱うのは、1~2 章の「モーセ誕生物語」を除けば、「モーセ物語」全 40 年のうちの最初の数か月に相当する。「出エジプト記」の構成は、以下のとおり。「モーセ誕生物語」（1~2 章）、「モーセ召命物語」（3~4 章）、「ファラオとの交渉と十の災いの物語」（5~11 章）、「過越と出エジプト物語」（12~15 章）、「最初の荒れ野物語」（16~18 章）、「シナイ契約伝承」（19~24 章）、「幕屋建設伝承①」（25~31 章）、「金の雄牛と掟再授与の物語」（32~34 章）、「幕屋建設伝承②」（35~40 章）。この構成から見て分かる通り、「出エジプト記」の中心主題は「シナイ契約」にあり、これによって「神の契約の民イスラエル」が規定されるのであるが、この「シナイ契約」に至る入口として「過越によるエジプトからの解放」が必然とされ、また、この「シナイ契約」に継続的に留まる方途として「幕屋礼拝」が位置づけられるのである。

・日課箇所は、「過越伝承」の一部で、神から告げられた「過越」の指示をモーセが民に告げる場面である。「出エジプト記」に収められた「過越伝承」は、最初の「（初子の災いからの）過越の出来事」の叙述物語であると共に、すでに「過越の出来事を記念する祭の規定」として物語られるという二重構成で編集されている（出 12 章）。つまり、ここに置かれている「過越伝承」は、後世に「過越祭」において用いられていた典礼化した制定文をほぼそのまま用いていると考えられる。

・「ヒソプ」は、旧約正典中に繰り返し出てくる植物だが不詳。通説では、抗菌・殺菌作用があるハーブとして中東で知られるシソ科の「シリアンオレガノ」と考えられている。

・「過越祭」は、日課箇所の伝承では、各家庭で祝われる祭とされており、現在に続くユダヤ教では、そのように祝われている。一方、旧約および新約中には、神殿で盛大に祝われる「過越祭」が伝えられている（代下 30 章、同 35 章、各福音書など）。これは、「過越祭」の規定の中にある「聖なる集会」に相当するものとして執行されていた考えられるが、「福音書」などの伝えることから推測すると、それによってエルサレムで「過越祭」を祝う人々は、本来の自宅ではなくエルサレム城内に宿を取り、そこで巡礼を共にしてきた者たちと「過越の食事」を祝うようになっていた。おそらく、それを可能にするために、「過越の食事」も規定通りに完全に実施しなくてよいような簡易儀式に、早い段階で転換していたと考えられる。祭に犠牲の羊を屠る形態は、イスラム教の犠牲祭（イード・アル＝アドハー）が知られている。

使徒書日課（ヘブライ 9 章より）

・「ヘブライ人への手紙」は、差出人も宛名人も不詳となった状態でありながら、「使徒書」の一つとして新約正典に加えられてきた書簡文書。4 世紀末のカルタゴ会議で「パウロ書簡集」の一つと数えて正典として扱われるようになったが、それ以前は、「パウロ書簡」の一つであることに疑義が呈され、全教会で正典として扱われることはなかった。この書簡を「ヤコブ、ペトロ、ヨハネ、ユダの手紙」と合わせて「公同書簡」の中に数える場合もあるが、通例ではない。この書簡が「ヘブライ人への手紙」と呼ばれるのは、2 世紀以来、本書簡がユダヤ人キリスト教徒に宛てて記されたものであったと考えられてきたため。本書簡の記述からは、宛先の信者らが基本的にはすでに神殿祭儀から離れていること、しかし一部になお神殿祭儀に留まろうとする者たちもあることが推認され、このような状況はユダヤ人キリスト教徒の置かれた状況を示唆する。本書簡の大部は、地上の（エルサレム）神殿で執り行われてきた祭儀が、キリストによって「天上」で執り行われる祭儀に取って代わったので、もはや地上の祭儀は不要になったとという説明に費やされている。このような神殿祭儀等の意義をキリストによって再定義し、旧来の祭儀に縛られない営みとして再構築することは、初代教会から始まっていたと考えられるが、ユダヤ戦争でエルサレム神殿が破壊（70 年）されて以降、不可避の課題となった。その事情は、ユダヤ教社会全体も同様で、それゆえに、ユダヤ教社会の主流となった「ラビ的ユダヤ教」が枠づける「祭儀の再定義」に抵触する分派（キリスト教会も！）は、「会堂追放」により独自の宗教集団を形成することを迫られたのである。

・日課箇所で扱われているのは、レビ記 16 章に規定される「贖罪日」の祭儀の再定義。年に一度、大祭司が至聖所に入り民のために犠牲を捧げて罪の赦しを執り成し祈った。現在のユダヤ教でも、「断食日」として多くのユダヤ教徒が「贖罪日」を守っている。

福音書日課（マルコ 14 章より）

・日課箇所は、「受難物語」の中に置かれた、イスカリオテのユダが祭司長らとイエス引き渡しの謀略を約束したことを伝える逸話から、主イエスと弟子たちが「過越の食事」を「主の晩餐」として祝ったことを伝える逸話までの箇所。前段の「香油注ぎ」の逸話を挟んで、祭司長らのイエス殺害計画の状況が描かれ、それに続いて「過越の食事」と「主の晩餐」の出来事に場面が移行する。「過越の食事」すなわち「最後の晩餐」の場面設定は、四福音書に共通するが、描き方は一様ではない。「マタイ」と「マルコ」はほぼ一致した展開でこの場面を描いているが、「マルコ」に比べて「マタイ」はより「イスカリオテのユダ」への関心を強めている。「ルカ」は、食事の席での「弟子の 1 人の裏切り予告」を「主の晩餐」の後に簡略に描くのみである。「ヨハネ」は、この場面が「過越の食事」であったかどうかを明示せずに、ただ食事の席で「弟子の 1 人の裏切り」が予告されたことを伝えており、他の福音書に比べて「イスカリオテのユダ」に関する解釈を断定的に記している。

・四福音書が共通して示すのは、主イエスが弟子の 1 人、イスカリオテのユダの「裏切り」を予告したのが「過越祭の最中の食事の席でのこと」だったという点である。この場面で「裏切り」と訳される語「パラディドーミ」は、元来「引き渡す、受け渡す」という意味の語で、日課箇所中でも 10 節では「引き渡そうとして」と訳されている。この語が「裏切り」（英訳では「betray」）と訳されるのは、古くからの翻訳の伝統に従ったものであるが、それによって、「イスカリオテのユダ」は「裏切者」というレッテルを貼られてきた。しかし、「パラディドーミ」に「裏切り」の語義はなく、広く中立的な「引き渡す」という行為動作の意味で用いられている。

・日課箇所は、「主の晩餐」すなわち「聖餐」の直接的な起源が「過越の食事」にあることを示す典拠の一つとされてきた。パウロも、「主の晩餐」の根拠を、この伝承に基づいて教えている（Ｉコリ 11:23 以下）。しかし、教会は、「聖餐」に「五千人の給食」などさまざまな食事の出来事によって示される意義を付与してきた。

来週の誕生日 （10 月 2 日～8 日）

主日礼拝の讃美歌から

・21-75 **番「今、装いせよ」**（＝Ⅱ95 番）。17 世紀ドイツの宗教詩人 J・フランクと当時随一の讃美歌作家 J・クリューガーのコンビによる。現代に至るまで聖餐讃美として広く用いられている。J.S.バッハは、この讃美歌を用いて作曲している。

・21-553 **番「キリストがわけられた」**（ニ 22 番）は、Land of Rest の曲名で知られる米国の民謡曲に、聖餐/愛餐に用いるための詞を讃美歌委員会が付したもの。米国では、この曲に「O Land of Rest」他さまざまな歌詞が付けられた讃美歌がみられる。

・21-82 **番「今こそここに」**は、ルター派の牧師・宣教師ヤラスラブ・ヴァイダが 1968 年に髭剃り中に着想して作詞したとされ、20 世紀後半の讃美歌創作運動の中でも傑作の一つと称されるもの。この歌詞のために作られた曲は、教会音楽教授カール・シャンクの作曲で、1969 年発行のルター派増補版讃美歌集で発表。

・21-180 **番「去らせたまえ」**は、「シメオンの賛歌」を歌う賛歌。スイスの宗教改革者J・カルヴァンの教会で音楽を担当したブルジョワが作曲し、カルヴァン編纂の「ジュネーブ詩編歌集」に収められてきた。

21-75「今、装いせよ」

Schmücke dich, O liebe Seele

1. Schmücke dich, o liebe Seele, / laß die dunkle Sündenhöhle, / komm ans helle Licht gegangen, / fange herrlich an zu prangen! / Denn der Herr voll Heil und Gnaden / will dich jetzt zu Gaste laden; / der den Himmel kann verwalten, / will jetzt Herberg in dir halten.
2. Ach wie hungert mein Gemüte, / Menschenfreund, nach deiner Güte; / ach wie pfleg ich oft mit Tränen / mich nach deiner Kost zu sehnen; / ach wie pfleget mich zu dürsten / nach dem Trank des Lebensfürsten, / daß in diesem Brot und Weine / Christus sich mit mir vereine.
3. Heilge Freude, tiefes Bangen / nimmt mein Herze jetzt gefangen. / Das Geheimnis dieser Speise / und die unerforschte Weise / machet, daß ich früh vermerke, / Herr, die Größe deiner Werke. / Ist auch wohl ein Mensch zu finden, / der dein Allmacht sollt ergründen?
4. Nein, Vernunft, die muß hier weichen, / kann dies Wunder nicht erreichen, / daß dies Brot nie wird verzehret, / ob es gleich viel Tausend nähret, / und daß mit dem Saft der Reben / uns wird Christi Blut gegeben. / Gottes Geist nur kann uns leiten, / dies Geheimnis recht zu deuten!
5. Jesu, meine Lebenssonne, / Jesu, meine Freud und Wonne, / Jesu, du mein ganz Beginnen, / Lebensquell und Licht der Sinnen: / hier fall ich zu deinen Füßen; / laß mich würdiglich genießen / diese deine Himmelsspeise / mir zum Heil und dir zum Preise.
6. Jesu, wahres Brot des Lebens, / hilf, daß ich doch nicht vergebens / oder mir vielleicht zum Schaden / sei zu deinem Tisch geladen. / Laß mich durch dies heilge Essen / deine Liebe recht ermessen, / daß ich auch, wie jetzt auf Erden, / mög dein Gast im Himmel werden.

21-82「今こそここに」

Now the Silence

Now the silence, now the peace, / Now the empty hands uplifted; / Now the kneeling, now the plea, / Now the Father's arms in welcome; / Now the hearing, now the power, / Now the vessel brimmed for pouring; / Now the body, now the blood, / Now the joyful celebration; / Now the wedding, now the songs, / Now the heart forgiven, leaping; / Now the Spirit's visitation, / Now the Son's epiphany; / Now the Father's blessing, / Now, now, now.

21-180 番「去らせたまえ」

Nunc Dimittis

Nunc dimittis servum tuum, / Domine, secundum verbum tuum in pace: / Quia viderunt oculi mei salutare tuum / Quod parasti ante faciem omnium populorum: / Lumen ad revelationem gentium,et gloriam plebis tuae Israel.